〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月庚寅、鈴印櫃鳴、聲如振、膳部八人之履共爲鼠嚙、又內印印盤褥爲鼠嚙、壬辰、卜食申柏原山陵告崇、仍遣使奉宣命、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年十一月廿日甲申、先是少主鈴從八位上美和眞人清江言、鼠嚙內印盤褥、至是神祇官卜云、觸穢之人供神事、仍成崇、由是大祓於建禮門前、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十七年六月十三日甲子、此日每夜有鼠跡、無方數、滿京路、或自北向南、或入宮城、或出城外、

〔三代實錄三十陽成〕元慶五年正月、是月諸衞陣多怪異、〇中略 左近衞府生佐伯安雄劒胡籙等緒有鼠嚙斷而將去、〇中略 右兵衞陣官人劒胡籙等緒數爲鼠所嚙、

〔吾妻鏡十八〕建永二年〇承元元年 八月十七日庚申、放生會御出之時、〇中略 而隨兵之中、吾妻四郎助光無其故不參之間、以行光被仰云、〇中略 助光謝申云、依爲晴儀、所用意鎧、爲鼠致損之間、失度申障云云、

〔古今著聞集二十魚虫禽獸〕安貞の頃、伊與國矢野保のうちに黑島といふ島あり、人里より一里ばかりばなれたる所なり、かしこにかつらはざまの大工といふあみ人あり、魚をひかんとてうかゞひありきけるに、魚の有所より光りて見ゆるに、かの島のほとりの磯ごとにおびたゞしく光りければ、悅て網をおろし引たりけるに、つや〳〵となくてそこばくのねずみを引あげて侍けり、其鼠引上られて皆々ちり〳〵ににげうせにけり、大工あきれてぞありける、ふしぎの事なり、すべてかの島には鼠みち〳〵て、畠の物などをも皆くゐうしなひて、當時までもえつくり侍らぬとかやくがにこそあらめ、海のそこまで鼠の侍らん事、まことにふしぎにこそ侍れ、

〔二話一言四十八〕奥州赤鼠

延寶七年四月比、奥州津輕領浦人磯山の頂上に登りて海原を見わたせば、おびたゞしく鰯のより候樣に見へければ、獵船をもよふし網を下げ引上げ見れば、下腹の白く頭と脊通りは赤き鼠